

第20回 『教行信証』に学ぶ会 講師:延塚知道先生 【ライブ版】

2023(令和5)年2月9日 会場 円徳寺

講題 :『教行信証』 伝承の巻 まとめ

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

こんにちは。たくさんの方がご出席していただいて、大変ありがとうございます。確かこれが新年初めてですね。おすこやかでなによりです(笑)。2年ちょっとかかって教の巻と行の巻を拝読してきました。今日で行の巻を終わろうと思っています。体調はまあこんなものでしょう。どこで倒れるか分かりませんが、倒れるまで、一生懸命皆さんと拝読できたらと思っています。

まあ、新年にあたりまして、あまり言うことでもないのかもしれませんが、新しい年になりまして、今度の月曜日から東本願寺のご門首、それからご新門の御前講義が始まります。二か月にいっぺんです。ここと一緒ですね。けども新門さんはまだ若いのですが、三十ちょっとですから、東大出の秀才ですけれども頭のいい、非常に素直な方ですので、何とか『教行信証』をお伝えして、大谷家に講義をさせていただくというのは、英彦山のご門徒が一軒もないような寺の住職ですので、大変光栄に思っておりますけども、まあ、ちょっと張り切っています。

それで、今申し上げましたように、教の巻、行の巻、これが長いのです。『教行信証』をずいぶん長くかかってお話をしてきましたが、後、信の巻、証の巻、一応、証の巻まで行けば、教・行・信・証まで行きますので、まあ少し肩の荷が降りると思っております。信の巻、証の巻は、教の巻、行の巻と同じくらいかかるかな、それでも2年位でしょう。そうすると、まあ5年以内に収まるかなと思っています。

教の巻は皆さんと拝読しましたように、ここは『大経』の引文で埋め尽くされていましたね。それも釈尊と阿難との出遇いを通して、お釈迦様が「出世本懐」を述べるところですね。出世本

懐を述べる経典は、何度も申しましたように大乘仏教の中で言えば実は『法華経』なのです。ですから『法華経』が出世本懐を述べている経典だから、日本でも皆さんも分かるように比叡山が一番力を持っているでしょう。中国でもそうです。天台の学者どもが一番力を持っていた。ですから従来、出世本懐という『法華経』なのだというのが仏教界の通念です。それに対して、「そうじゃないんだ。『大経』なんだ」ということを宣言したのが『教行信証』が初めてだと言ってもいい。そういう意味でね。そういう意味では、これまで大乘仏教2500年ずっと続いて来ましたが、でも、『法華経』を中心とする天台宗を中心としてずっと大乘仏教が伝わって来たわけです。

それは皆さんご存知のように、いわゆる大乘菩薩道と言う。菩薩になって、あの宮沢賢治が言うでしょう。「菩薩になって東北の貧しい方々を助けていくのだ」と。ああいう菩薩のような人間を生んでいく、それが大乘仏教の大きな目標でした。ところが、ああいう方は、やっぱりよほど優れた方でね、私どものような生活者に「菩薩になれ」と言われても、気持ちはないわけではないけれども、やっていることは生活者ですから、ですから生きていくのに精一杯。そういう人が80パーセント以上いるわけで、その人たちが生きていく中で一番苦しんでいる人たちです。このコロナ禍、いろんな状況がありますが、やはり最後には生きていくのに苦しんでいる人がたくさんいる。そこれがやっぱりどうしても問題になってきますね。そういう人たちこそ、仏教が恵まれなければならない。そういう眼が親鸞や法然にあるわけですね。そういう人たちに仏教が恵まれるとすれば、どういう道があるのか、それを明確にしてくださった経典が『大経』なのです。

『大経』は見たらわかるでしょう。阿難が、それも仏弟子の中でお釈迦様が生きていた間は覺りを悟れなかったと言っている仏弟子です。その仏弟子がお釈迦様の教えに遇って、そして感動して、そして菩薩が覺りを開くのと一緒のような覺りをいただいて、そして堂々と凡夫が凡夫のまま生きていく道を開いていった。この経典こそ一切衆生に開かれた仏教なのだということで、宗祖は『大経』を取り上げて、しかもお釈迦様と阿難との出遇い。ですから修行をして苦勞をするというのではなくて、「本当の教えに遇うこと」。本当の教えに遇うこと。人は遇ったものによって変わります。皆さんも遇ったものによって自分が生まれてきています。

今、皆さんがそこにあるのは、これまで皆さんが出遇った人が全部自分になっているのです。ですから遇ったもので人は変わっていくのだということを仏様の方が見抜いて、私と同じように修行をせよと。修行できる人はいいい。しかし、できない人のためには、今度は仏様の方が苦勞をして、遇っただけで分かる教えにまでする。それが浄土教の『大経』の大変優れた教えの意味ですね。ですから、お釈迦様と阿難とが遇っただけで、教えに遇っただけで、初めて大きな仏様の世界に眼を開いていった。その出遇いが教の巻のすべてを占めていました。

そしてお釈迦様は、ここに自分が生まれてきた理由がある、「唯説弥陀本願海」(「正信偈」)、本願を説くのだと。そして本願の教えによって必ずみんな仏になっていくのだというふうにお釈迦様が宣言されるわけです。ですから本願と言っても、二つ意味がある。一つは、『大経』の中に四十八願として説かれている。これは四十八の本願をよく読めば分かります。また、親鸞聖人が『教行信証』で引用している本願は八つありますね。その八つは『大経』の中に成就文が説かれている願です。成就文というのは、親鸞聖人が法然上人に出遇った時に、この身にいただいた感動を、教の面、行の面、信の面 証の面というふうに、この身、救われた身、そこにいただいた

感動が八つの本願成就文として押しえられている。それはもうちょっと言うと、当たり前の話ですが、私たちは日常生活をするときに自力で生きていない人は一人もいません。みんな一生懸命自力を尽くして生きていく。そういう自力を尽くして生きていく人間が、いきなり「他力だ」と言われても何のことか分かりません。だからまずは自力を尽くしなさいと、そして自力を尽くして頑張りなさいと。うまくいくこともある、しかしうまくいかないことの方が多い。みなさんどうですか。自力では解決がつかない、そういう問題を初めから人間は備えている。

なぜ僕はこんな小さい寺に生まれたのか分からなかった。なぜこんな顔に生まれたのか分からなかった。いやでした。父親とそっくりです（笑）。嫌いな父親とそっくりですから嫌だった。嫌だったけど、なぜかは分からない。だから自力を尽くして一生懸命に頑張って自分で問題解決することに努力をなさい。そこから本願は始まる。そして刀折れ、矢が尽きて、はじめて自力で生きているのではない、大きなもっと大きな世界に、私たちに眼を開かせてくださる、そういう本願が、自力から他力にちゃんと導いてくださる道筋がちゃんと建っている。特に真仮八願のところにはちゃんと、凡夫がどうして仏になるかという道筋がちゃんと建てられている。だから、これは教え、私たちにとって大変大事な教えです。自力を生きる者がどうして他力に目覚めていくか、どういう道筋を通るのか。これは大変大事な教えとしてある。

もう一つは、「そうか！」と分かった時に、うまいこと言えないのですが、言ったらいけないのですが、皆さん一人ひとりの命の深いところから、生まれた時から、何かこう、せかされているような、何かに突き動かされているような、ある時には学校で頑張って勉強しようとか、勉強できなくて「ああだめやなあ」と思って、「聞法しとっても頭が悪いし少しも入らん」と。「こっちから聞いたらこっちから抜ける」とさっき言ってました。大丈夫、心配せんでもいい、大事なことは身に貯まるから。頭はたいしたことはない。…何言うと思ったんか忘れた（笑）。

そんなふうにならなくても、なんか私たちを突き上げてくるような、なんかよくわからないけれども、そんなものがあるでしょう。こんな自分でいいのだろうかとか、こんなので大丈夫なのだろうかとか、これからどうなるかわからないけど、こんなので本当にいいのだろうかとか、何か下から突き上げてきているような、そういう働きをみんな感じているはずですが。それが解けないと、それが何であるかということが解けないと救いにならない。いつも何か責められているような、追い立てられているような、しかも何になっていいかわからない。ある時は金持ちになったらいいと思ったり、ある時は好きな人と一緒になったらいいと思ったりしたけど、少しも満ち足りない。いまだに満ち足りない。それはいったい何ですか、それ。それが何なのか、ということが分からないと救いにならない。それは娑婆を生きている私たちの頭の中では分からない。金とか地位とか名誉とか女とか男とか、そんなようなことしか考えつかないのですから。何を持ってきても絶対満足しない心がある。

それは何なのか。何を求めているのか。それは、本当は仏になりたい。私たちには分からないけど、本当は浄土に生まれたいのだと、仏になりたいのだと。今まで競争社会の中で勝ったら何とかかなると思って頑張ってきたけれども、まあ勝つときもあれば負けるときもある。苦しんできた。しかしそんなことは娑婆のことですね、その本当の深い意味を私たちの後から突き上げてくるような心の深い意味を教えていくのが仏教です。最終的にそれが本願なのだ。私たちの命の深い祈りであると。本願の教えが本当に分かった時に、外から「本願に目覚めよ、自力を尽くせ」と教えてくださっている先生と、内から「汝一心正念にして直ちに來たれ」と言う声があったの

だと。今まで金やら地位やら、何かそんなものばかりにうろうろうろうろして来たけど、今はっきりしたと、「私は浄土に生まれます」と。そうやって初めて、本願の教えが私たちのこの命を貫いて、そしてこの娑婆を命ある限り元気に生きて、必ず何者とも比べないでいい仏になりたい。それが、私が本当に願っていたことなのだ。二つ教える。それを本願の成就という。だから仏法を学ぶということは、単なる勉強をしているわけではない。知識として学問として勉強することも大事、知ることも大事。しかし、今言ったように、本願の教えがこの身を貫くという時に初めて、外からお釈迦様が『大経』を説いてくださったのだ。そして内から、命の深いところから、阿弥陀如来が「汝一心正念にして直ちに來たれ」と呼んでいたのだ。今はっきり分かった。地位や金や名誉はそんなことはどうでもいい。命を懸けて成りたかったものは、実は何者にも比べないでいい、私は私でよかったと言えるものになりたかったのだ。その道に今立った。それがお釈迦様と阿難との出遇いの意味ですね。

そこに一切の人が必ず救われる道があると、お釈迦様が宣言したわけです。素晴らしいと思いませんか。他の経典は滅法になったら滅びてなくなる。『大経』だけは滅法になっても滅びないとお釈迦様が宣言してます。なぜか分かりますか。今言った通りです。人が一人いればそこに本願がはたらいていますから、宇宙の真理だとか、宮沢賢治の資料館に行ったときにそう思いました。やっぱりあの人は偉い人や。菩薩や。宇宙の真理と一つになった。だから、なんかこう宇宙の星の世界に汽車に乗って行ったりするでしょう。風がワーと吹いて、『風の又三郎』とか、なんかその大自然の宇宙の真理と一つになったのだと、さかんに言うけど、あんなの見ていて、俺はそんなに偉くないから宇宙の真理ってよく分からんなど、こう思うけど、「そうだ、大事なものは本願なんだ」と。私の中にはたらいているこの本願のはたらきと、これを引き出して、そして凡夫を必ず仏にする道に立たせる。それは『大経』しかない。なるほど、人が一人生きていたら『大経』がはたらきます。だから末法になろうが滅法になろうが、『大経』があつて人が一人生きていれば必ずそこに仏教がはたらくと宣言したお釈迦様の気持ちがよく分かる。そう思いませんか。宇宙の真理だ、何だかんだ言わない。本願です。命の祈り。その意味を教える。そして救いに導く。それが『大経』の素晴らしいところです。そこに菩薩道の一乗の覚りと同じものが自力無効を通して実現するのだと。その伝統が、今度は行の巻になるとずっと七祖の伝統として説かれていきましたね。

七祖はその時代、その状況、私たちは今この時代にいるからこういう時代を生きているのですよ。まさかあの時代に SNS があつたわけではなかろうし、あんなもので人が会って結婚したとか、闇バイトを募ったとか、そういうことは時代にはなかった。今、私たちの時代にあるわけで、そんなふうに、時代というのはずいぶん違うわけですね。けれども、さっき申し上げたお釈迦様と阿難との出遇いで、南無阿弥陀仏の教えだけはどんなに時代が違おうが、どんなに文化が違おうが、伝統されてきたのだと。そしてそこでたくさんの人を救ったのだと。その代表が七祖です。だから、インドの龍樹・天親の菩薩たち。

まあインドに…、こんなこと言うとならまた終わらんようになる（笑）。皆さんインドに行ったことありますか。僕がもうちょっと若かったら皆さんをお連れするのですがね、僕は17回行つとるんだ（会場どよめき）。若い時は毎年行つとつた。いいよ！インド行ってごらん、頭おかしいからインド人は（笑）。ほんとおかしい。もう訳分からん。僕らと全然違う。汚いもう、高級ホテルに泊まっつても、コップをばつと持ってきたら口紅が付いとんのやで（笑）。ほんとほん

と、そんなのは日常茶飯事よ。ポンと持ってきてポンと置くでしょう。口紅がいっぱい付いてるから「ちょっとこれ、変えてくれ」と言ったら「オーケー」と言ってパーンと持ってきて、また付いとる（笑）。なんで変えろ言うとするかの意味が分からない。それで、「口紅が付いとる」と言ったら、「no problem（問題ない）」と言って、バツバツと手の指でグルグルとこすって、もっと汚くなるとるわ（笑）。それをぱっと出して、タッタッタッタ「please」と言う。わけわからんでしょう。頭おかしい（笑）。こんだけおかしい世界があるのかなと思う。

貧しくて食べるものがないから、じっと座って、朝からじっと太陽を見て、うだうだうだうだ喋って、時々お茶を飲んでポッとして、僕らが観光に行つて帰つて来てもまだじっと座っている。「君らそれだけ貧乏やったら、なんかちょっと働けよ」と思うでしょう。だから「あの人たちは何をしていますのでしょうか」と聞いてくださいと寺川（俊昭）先生に言ったら、先生、頭をかきながら帰つて来て「あの人たち偉いです」「なんで」と言ったら、「君ら何をしていますのや」と聞いたら「座ってるんや」と言いました（笑）。「just sitting(何もせずに遊んでいる)」と言いました。確かにそうや、座ってるんです。「それがどこが悪いねん」と。「座つとったら何がおかしいねん」と言わんばかりに言われて、「あの人たち偉いです」言うて、まあ禅問答みたいな話やけど、それだけ違うのですよ、生活が。けどね、違わないものがあるのです。

我が強い、インド人は。喧嘩し出すともう負けずに「うわー！」と喧嘩する。うわーと殴る奴もおるけど、殴らないでにらみ合つて喧嘩している。ベナレス大学に行つたのです。ベナレス大学の前の本屋に行つたら、行つた時からずっと僕が帰るまで2時間ほど喧嘩していた人がおつた。それはたぶん学者でしょうね。どっちとも手を後ろに組んで「わ！わ！わ！わ！」と言うと相手も「わ！わ！わ！わ！」と言う（笑）。ずっと吠えまくつてましたね。あの人たちはよほど根性きついと思う。あれは人間の共通なんです。それを超える道。それが仏教なのだから、確かに人間がどんな文化であろうが、どんな生活であろうが、確かに「我を超えろ」、これが仏教の一番大きな課題ですよ。

我を超えろという時に、「考えるということを超えなさい」という言い方もある。二つ分別するからいつも。勝つか負けるか、損か得か。仏教は中道という。中とは真ん中、真ん中と言っても分からないから、勝つか負けるか、損か得か、分からない、その分からないところをはっきりしなさい。それは「身の分別を超えなさい」という言い方もある。それは「自我を超えろ」ということと一緒です。そういう意味で仏教は世界中に伝わつて来た。その時代その時代、文化や伝統が違つても人間がそれで助かつてきた。それは今申し上げるように、皆、強烈な自我をやはり生きてきた。そしてそこで苦しんできた。人間だけが苦しみますよね。犬や猫は何も苦しんでいません。だから、そういうものを超えていった伝統が「七祖」として、龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空、インド・中国・日本、そして今私のところまで念仏が届いたのだと言って親鸞聖人が喜ばれるわけですね。

「真宗の教行証を敬信（きょうしん）して」（総序）、お釈迦様の教え、それを行じ、そして悟つていった、この「七祖が明らかにしてくださつた教行証を私は敬つて信じる」。そういう立場で『教行信証』が書かれていくわけですね。ですから念仏の伝統ですが、七祖はインドでこういうふうに言われた、中国ではこんなふうに言われた、それから日本ではこんなふうに伝統されてきたというふうに、時代と状況を踏まえて親鸞聖人は長く七祖の伝統、南無阿弥陀仏の伝統を説いてきました。

そして行の巻の後半は、その南無阿弥陀仏によって開かれてくる覚り、それは、早く言えばインドの龍樹は「阿耨多羅三藐三菩提」（『十住毘婆沙論』）、こういう空（くう）の覚り、それを世親は「功德大宝海」。「能令速満足 功德大宝海」（『浄土論』）。こういう海のような大きな仏様の宝が満ちた海のような覚りに私たちを導いてくださる。悟るのではない、自力無効ということを通して初めて、初めからあった大きな海のような仏様の世界に眼を開いたのだと。だから「海」という、これが浄土真宗の覚りの名前だと私は申し上げました。

覚りと言えは菩薩のように悟るということを考えますけれども、そうではなくて、これは「能・令・速・満足」。如来の方からよく速やかに満足せしむる。他力によって開かれた覚りだと、こう言ってるわけです。いいですね。南無阿弥陀仏によって頭を下げて自力無効だと言って、すべてから手を離した。その時に初めからあった大きな覚りが如来の方から私を包んでくださった。だから「能令速満足 功德大宝海」、これが浄土真宗の覚りの名前なのだ、こう言って親鸞聖人は行の巻では「一乗海」と言う。これが素晴らしい他力の覚りの名前。

一乗というのは、これは『法華経』の覚りの名前です。一乗を表すのが『法華経』ですね。ですから一乗と言えは、これはだれでも『法華経』だと思う。だから『法華経』が表す覚りは海のように「能令速満足」、向こうから開かれてくる。だから「誓願一仏乗」である。こういう素晴らしい言葉で、念仏が開く覚りまで言及してくださっている。そこまでお話をしてきたわけです。

それで、その後はもう、そう難しいことはありません。この一乗海というものを明らかにしてくださって、聖典の198、199ページのところ（西197～199、島12-44～12-46）、この一乗海のはたらきに二つある。一つは凡夫のままで仏になっていきたいというふうに私たちをひっくり返してくださる。今まで自力一杯に生きてきた人間が大きな他力という世界に生かされている。うれしい、ありがたいと言って、一乗海を生きて仏になりたい。仏になるという言葉がじっくりこなかったら、「比べる必要のない者になりたい」、「私は私でよかったと言う者になりたい」。そういうふうな凡夫のままで転じてくださる。

もう一つは、そこには絶対に自力を入れない。自力を宿さない。当然、自力無効ということを通して一乗海が開かれてくるのですから、一乗海という覚りは人間の手垢がどこにもついていないのです。だからこの一乗海こそ、お釈迦様も仏にした覚りなのです。申し上げていること分かりますかね。中学校や高校の教科書だったら、仏教を開いたのはお釈迦様だと書かれているわけだけれども、親鸞聖人のお釈迦様の位置づけは違うでしょう。「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず」（『歎異抄』第二条）。釈尊を本当に仏にしたのは本願なのだ、だからお釈迦様以前の仏教、お釈迦様をお釈迦様として覚者としたのは本願なのだ。この一乗海こそがお釈迦様を仏陀にしたのだと。こういうまなざしがあるわけですね。それはそうです、一乗海というのはお釈迦様が編み出したわけではないから、もともとあった世界に私たちは眼を開いたのですから当然のことだと思います。そんなふうに真宗の覚りの本願の一乗海は、これは八万四千のお釈迦様の法門を超えているのだということが化身土の巻に書かれています。

それは前に一度読みましたから覚えている方がいらっしやると思います。それで、今ここで申し上げましたように、この「転成」ということの証拠は、すぐに、

『浄土論』に曰わく、「何者か莊嚴不虛作住持功德成就、偈に、仏の本願力を観ずるに、遇（もうお）うてむなく過ぐる者なし、よく速やかに功德の大宝海を満足せしむるがゆえに」（東聖典198頁、西197、島12-45）。こう世親が歌ってくださった。この他力の覚りをこう

いう言葉で歌ってくださったのだけれども、曇鸞は、この「不虛作住持功德成就是、けだしこれ阿弥陀如来の本願力なり。今まさに略して、虚作の相の住持にあたわざるを示して、もってかの不虛作住持の義を顯（あらわ）す。乃至」。ここは乃至されてますけども、ここに省略されているのは、人間の世界で「こうすれば、こうなる」というふうには必ず決まったことはない。良かれと思ったことが悪いことになるし、善いと思ってやったことが悪いことになる。だから人間の世界では、必ずこうなるということはないのだと。

ところが仏の本願力に遇った人は、どうであろうと必ず仏になる。それを「不虛作住持」と言います。不虛作住持の「不虛作」というのは「空しく終わらない」ということ。本願に遇えば必ず仏になる。凡夫であろうと菩薩であろうと、どっちであろうと仏になる。

「言うところの不虛作住持は、本（もと）法蔵菩薩の（因の）四十八願と」、「今日（こんにち）」、阿難が「今日お釈迦様」と言って、「今日、今日」と五徳瑞現を述べるでしょう。あの「今日」やね。阿弥陀の智慧に触れた、この今日の阿弥陀如来の智慧、光明無量・寿命無量、この二つのはたらきによって私たちは必ず仏になる。本願力によって仏になる。

「願もって力を成ず、力もって願に就く。願、徒然ならず、力、虚設ならず。力・願相符（あいかの）うて畢竟じて差（たが）わず。かるがゆえに成就と日（い）う」

本願の成就というのは、法蔵菩薩の因願に帰命する。ところが帰命した時に、なぜか大きな覚りの世界が開かれてくる。「うわー、なんで凡夫のままでこんな不思議なことが起こるのか」と思うと、「ああ、これは法蔵菩薩が本願を建ててご苦労してくださったからだ」と、また因に帰る。因と果とがいつも照らし合わせて、私たちに必ず仏にするというはたらき（本願力）によって、本願力がちゃんと仏にしてくださる。それを本願の成就というのだと、こう押さえておられます。見事ですね。一乗海の「転成」というのは、この『浄土論』のここにあるでしょうと。世親が言った通りです。

もう一つは「自力を入れない」です。「不宿」というのは、『浄土論』の仏の「大衆功德」というところにあります。「天人不動衆 清浄智海生」（東聖典137頁）。浄土の天人、浄土の方々はどうな人も如来の清浄の智慧の海から生まれてくるのだから、元は娑婆で凡夫であろうが菩薩であろうが、よくできる人であろうが、できない人であろうが、ともかく自力無効ということを通して智慧の海から生まれてくるから、そこには自力ということは何もない。これが「天人不動衆 清浄智海生」の理由です。

「また曰わく、『海』とは、言うところは、仏の一切種智、深広にして涯（きし）なし、二乗雑善の中下の屍骸を宿さず」。分かりますね、阿弥陀如来の智慧は深広にして涯底なし。声聞や独覚の二乗がいくら頑張っても届かない。まして私たちのような凡夫がいくら「善」だと言っても、そんなものは何の意味もない。そういうものを一切入れない。「これを海のごとしと喩（たと）う。このゆえに「天人不動衆 清浄智海生」と言えり」と。ここまでが「不宿」、自力を入れないということなのです。

もう一つ大事なことがある。「不動」とは、言うところは、かの天人、大乘根を成就して傾動（きょうどう）すべからざるなり」。難しい言葉ですけど、不動というのはどういうことかと言うと、「浄土に生まれた人たちは、大乘菩薩道の菩提心を完成して、そして、それから微塵も退くことがない」。こういう意味です。他力の信心こそ人間の心を超えた仏様の回向の信心だから、その信心こそが大乘の仏教を全うする。そういう大乘の根を完成していただき、そこから微塵も動

くことがない。菩提心というものは、実は「金剛の信心」である、ということがちゃんと天親菩薩がそう歌っている。天親は菩薩だから、その天親菩薩が「私の菩提心は浄土に生まれた時の信心なんです」と、こう言ってるでしょうと。

だからこれは分かるでしょう、明恵が「自力の信心を否定した法然はけしからん」と言って『摧邪輪』を書いたわけですね。それに対して、「いやいや法然はなにも菩提心を否定したわけではない。自力の菩提心では往生しないということを言っているのもあって、他力の金剛心、信心こそ本当の大乘を実現する大乘根であると世親が言っているでしょう」と、ここにそう書いてある。分かりますね。ですから親鸞聖人は明恵の自力の菩提心は否定しますが、でも、「本当の菩提心は、実は如来回向の信心であるということを世親菩薩が教えてくださってますよ」と、ここで言っていることになります。

この後、今度は浄土教の教学を完成させた光明寺、善導大師です。ですから善導大師でも「我（われ）菩薩蔵」と、「私は今言った菩提心を、金剛の信心によって菩提心を完結して、菩薩と同じように、菩薩のように生きていくのだ」と、こう善導大師はおっしゃっている。そして、なぜかというと、「頓教」（とんきょう）。自力無効ということを超えて、すぐに覚りが開かれるのを頓教と言います。自力でずう〜と努力して、いつ覚りが開かれるか分からんけど、一生懸命長いこと努力するのを「漸教」（ぜんきょう）と言います。分かりますか。「頓教と一乗海とに依る」と。善導大師もやっぱり偉いでしょう。「自力無効ということを通して一乗の覚りをいただいたんだ」と。「だからそれによって私は菩薩のごとく生きていくと、こう宣言しているのが善導大師なんだ」と、こう言っています。

これまで何度も申し上げましたが、『観経』の註釈書は残っているだけで四つあります。天台智顛が書いた『観経』の註釈書、それから慧遠という中国の古い学者が書いた『観経』の註釈書、それから龍樹の勉強をしていた吉蔵と言う人が書いた『観経』の註釈書、それに善導大師の書いた『観経』の註釈書の四つが残っています。善導大師が他力の仏教を明らかにしているから、法然上人は善導大師を引用し、善導大師に依る。親鸞聖人もそれに依っています。

ところが皆さんは読んでないと思いますが、『摧邪輪』を読みますと、観経疏が出てくるのは全部、天台智顛、それから、慧遠、吉蔵、こういう人たちの自力の仏教の観経疏が明恵の『摧邪輪』に出てきます。ですから、こういうふうに、ここで親鸞聖人がなにげなく引いているように思いますけど、次に、善導大師は菩薩道、「我は菩薩のように生きていく」と言っていると、善導大師がね。他力の仏教、自力無効という仏教を明らかにして下さった善導大師が、「私は菩薩道を、菩提心を持って菩薩のように生きていくのだ。一乗海に依るからだ」と言ってるでしょうと。こう言うのは、実は背景に、今言った自力の観経疏を書いた人たちがいる、それに対して親鸞聖人はここでこう言っているわけです。

その次、「(般舟讚) また云 (い) わく、『瓔珞経』の中には漸教を説けり」。

これね、私が何度も言ったように、十信・十住・十行・十回向・十地・等覺・妙覺というふうな階段を登るように階段が建てられているのが大乘の菩薩道ですね。『菩薩瓔珞経』の中には五十二位の階梯が説かれているから、それはちょうど階段を登るように徐々に登っていく道が説かれている。だけど、万劫、万年のあいだそれを一生懸命努力をして、修行してやっと不退転をいただく、そういう道だと。万年と言ったら、「え!」「はっ?」(笑) やね。今は長生きだから、1000年ですから、要するに不可能だと言ってるわけです。要するにそんな道は建てられてるだけで

不可能だと。だけど『瓔珞經』の中にはそれが説かれている。『觀經』・『弥陀經』等の説は、『大經』はこれまでずっと述べてきてるからいいにしても、『觀經』・『弥陀經』等の説は、すなわちこれ頓教なり」。自力無効ということを教えてすぐに一乗の覚りが開かれる頓教である。そして「菩提藏なり」。菩薩のような強い金剛心、金剛の信心をいただく。だからその信心に依って仏教を歩む者になっていくのだと。こういうふうにはずっと一乗海のあと、親鸞聖人はこんなふう展開していきます。

こう見ていると、皆さんもお気づきだと思いますが、「浄土往生」とかね、なにかその、浄土教という「浄土に往生していく」というイメージが強いでしょう。ところがこれは、僕は少しも脚色していませんよ。親鸞聖人がおっしゃる通りに読んでいるのですが、これは、「大乘の覚り」を追いかけていて、その「大乘の覚り」に依って私たちは菩薩のような生き方になる者にひっくり返されるのだと。こう言っているわけですね。

その次、またなかなかいい言葉だから覚えておいてください。「樂邦文類に云わく」、『樂邦文類』（らくほうぶんるい、※西聖典は、らくほうもんるい）というのは、親鸞聖人がお元気なころに、中国の南宋と言う時代ですが、その頃に中国で出た本です。だからこれ、今で言えば新刊書。出てすぐの本。親鸞と同時代に中国で出た本ですから、これは今で言えば完全に新刊書です。こんなものがよく手に入ったなあと思うのですが、やっぱり京都あたりに入っているのですね。『樂邦文類』、樂邦というのは分かりますね。浄土に生まれていくという浄土教の文章をたくさん集めた文類です。文集です。

ところが、この『樂邦文類』と言うように、「文類」という言葉がついた題はこれしかないのです。だから「教行証“文類”」と付いてるでしょう。『頓浄土真実教行証文類』ね。この「文類」はこの『樂邦文類』、ここからおそらく親鸞聖人がいただいたのではないか。この文類は今言うように、何も解説とかなくて、これまでたくさんの浄土教の祖師たちが書いた文章をただ集めただけだから、『教行信証』もそれにならって文類にするのだと。自分は凡夫だから菩薩のように自分の意見を申し述べる立場ではないから、だからこれまでたくさん書いてくださった人の文章を集めて文類にするのだというのは、この『樂邦文類』から取ったものではないかと言われていきます。恐らくそうだと思います。これしかないのです、文類という書物はね。しかもこれは新刊書です。今出たばかり、ほやほやの文章ですね。これは宗暁（しゅうぎょう）という禅宗の坊さんが編集したものです。宗暁という人はなかなか偉い人ですけど、これはいい言葉ですよ。

「**畏丹（かんたん）の一粒は鉄（くろがね）を変じて金（こがね）と成す**」。畏丹（かんたん）というのは薬。漢方薬であるでしょう、正露丸とか樋屋奇応丸とか、あんなものです。田畑先生に怒られるかもしれんけど（笑）。畏丹という薬を鉄にちょっと付けたら、その鉄が金になると。ほしいものですね、これ（笑）。これは譬えやから、それはその次、

「**真理の一言**」、これは南無阿弥陀仏のこと。「**真理の一言は悪業を転じて善業と成す**」。これ、これよ、これ、「転」。いいですか、僕らは仏教を勉強していても、「あれか、これか」の頭で聞いているから、悪いことをなくしていい者になろうとするから、暗い顔になる。いつまでたってもいい者にならないから、暗い顔になるでしょう。それは違うんだ。仏教は煩惱がそのままに仏になるエネルギーに変わると言うわけです。その「転」ということが分からないと暗い顔になるぞ。うん、うん。だって、まあ僕の領解を言うてもあれやけど、泣いたり、苦しんだり、悲しんだりすることがあるでしょう。うちの奥さんが入院しとって、私はもう辛くてよう泣いた。「うお

一」と泣いて、泣いているときに馬鹿だなと思うんや。やっぱり仏さんの言う通りでしょう。生きるか死ぬかは分からないでしょう、いくら心配しても分からないし、代わってやりたくても代われないし、結局最後には、「ああ、代わることもできないし、俺は何もできんのやなあ」と、「南無阿弥陀仏」言うて、もうそれは「生きてくれ！」と言うしかないと思うて、「やっぱり仏様に背いている、馬鹿だな」と思って、初めて仏様の世界に帰って行くわけです。それがないと帰れないのです。だから、それを転じていくわけです。だから、欲深くて苦しんだり悲しんだりしているときに、仏さんのことを思いなさい。「ああ馬鹿だなあ」と思って、「ああ欲が深くてよかったわ」というふうにならなくてははいけない。それが「転」です。悪い者をやめていい者になろうとするからしんどくなる。いい者にはならんならん。それは普通の常識はそうです。

そうではなくて仏教は、そのままが転じて仏になる。これは僕が言っているのではないのです。親鸞聖人がそう言っている、493ページ（『高僧和讃』、西585、島11-26）開けてごらん。「転」ということが大事なのです。「無碍光の利益より」、これは分かりますね、仏様の教えが私の体をつらぬいた。人間が逆立ちしても分からない、自我とか自力というところに地獄の本があるということが照らされて、「威徳広大の信をえて」、初めて大きな広大な世界に眼を開いた。そしてその信心をいただいて、「かならず煩惱のこおりとけ すなわち菩提のみずとなる」。

「ああ今まで苦しんでよかったなあ、この煩惱の身があったからこそ仏さんの教えが聞けたんや」と。「罪障功德の体となる」、罪障というのは煩惱です。「煩惱こそが仏様の功德の体となるのだ」と。「こおりとみずのごとくにて こおりおおきにみずおおし さわりおおきに徳おおし」と、こうあるでしょう。煩惱が強くて苦しんだ、悲しんだ。この間言ったでしょう、輪ゴムを引っ掛けたようなものやと。うわーっと引っ張って、苦しんで苦しんで苦しんだ。苦しんで、なんで苦しんでいるかということが、「無碍光の利益」として教えられる。仏様から背いているからです。だから苦しんでいるのです。金がないからじゃない、人がつらく当たるからじゃない。仏様から背いていたということが苦しみの本であったということが知らされると、そのまんまで、煩惱で離れてきていたエネルギーと同じ力で引き戻される。それを「こおりとみずのごとくにて こおりおおきにみずおおし さわりおおきに徳おおし」と。煩惱があるから仏教が聞けたのです。ねえ、犬やら猫は何も悩みません。その代わり仏法は聞けません。犬や猫は最初から最後まで仏法の世界を生きているのだから、時々私は猫に言うのです、「南無阿弥陀仏と言ってみい」と言ったら、知らん顔しとるわ（笑）。何にも言わない。「俺はもうニャモアミダブツやから」みたいな顔してます（笑）。あれがそうなんや。だから、あれは喜びも悲しみもないよ。だから仏法に目覚めた喜びもない。ところが人間だけは煩惱で苦しみます。いっぱい苦しんで、苦しんだあげくに「ああよかった、このために、今日のために煩惱があったのだ」と、「このために仏さんの教えが聞けた」というふうに転じていかなくてははいけない。転じていかなくては。仏教に背いているから苦しいのです。仏様に背いているから苦しいのです。金がないからではない、人が冷たくするからではない。自体満足がないからです。

いつも外ばかり見て、外に期待をする、そうではない。このままで十分です。比べる必要がない。このままで全く120パーセントOK!となれば、どこに文句があるか。それが、今言う、そういうことになるためには、あの人に辛くされたとか、この人から冷たくされたとか、あるでしょう、いっぱい。「その都度苦しんできたけど、ああ今よく分かった」と。「自分が一つも自分で満足するものに遇っていなかったからや」と。「今、比べる必要がない者になる。それによって

初めて仏になる道に立った」。というところに必ず、煩惱で苦しんでいることを通して引き戻されていく。転じられていく。そこに仏教の大切さがある。仏教の教えを聞いたら、そんなふうを考えて、乗り越えていかないと苦しいよ、辛いよ。いつまでたっても、いいか悪いかということになると、もうそれは死ななしようがない。死んだら多分何にもなくなるでしょう。そうだから言ってるんです、浄土に往くと。命終わったら浄土に往くと。だけど生きてるときから、「この煩惱の多い自分を恥ずかしいと思うけど、仏様の教えが聞けてありがたかった」と言っていけるほどうれしいことはないでしょう。それが大事です。

この「真理の一言は悪業を転じて善業と成す」。禅宗の坊さんだけど、なかなかいいことを言うでしょう。よく分かっているのですね、宗暁という人も。このあと少しありますから、少しだけまとめて行の巻は今日終わっていきたいと思います。僕は脚色していません。親鸞聖人の『教行信証』を読むと、なんか浄土教の仏教に立っておられても、自力無効ということで、浄土教の仏教に立ってます。立ってるけど、全く、これ大乘仏教の論理の展開になっているのがよく分かるでしょう。その辺が親鸞聖人の偉いところです。浄土教の法然上人の弟子として浄土教の責任を取らなければならないけれども、大乘の土俵に浄土教をもう一回返して、そして、大乘のところで勝負しましょうというのが親鸞聖人の『教行信証』の大事なところです。それを果たしていったのが『大経』という経典ですね。ちょっと休憩しましょう。(休憩)

講義 2

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。

それではもうしばらく、行の巻を最後まで目を通したいと思いますが、その次に、これ皆さんどう思いますかね、この一乗海をお述べになって、転成と不宿をお述べになって、そして今言う、もう一度宗暁の言葉によって「真理の一言は悪業を転じて善業と成す」と、こう言ってその次に「しかるに教」、教え、これは教行の巻ですから、199ページです(西199、島12-46)。善導大師の「玄義分」と『般舟讚』が終わって、今度は『楽邦文類』の文章があって、その次、「しかるに教について」、念仏の教えとその他の自力の教えというものと比較対論するに、難易対、念仏は易行、自力の仏教は難行道、念仏は頓、自力は漸。念仏は横超、横様に超える。

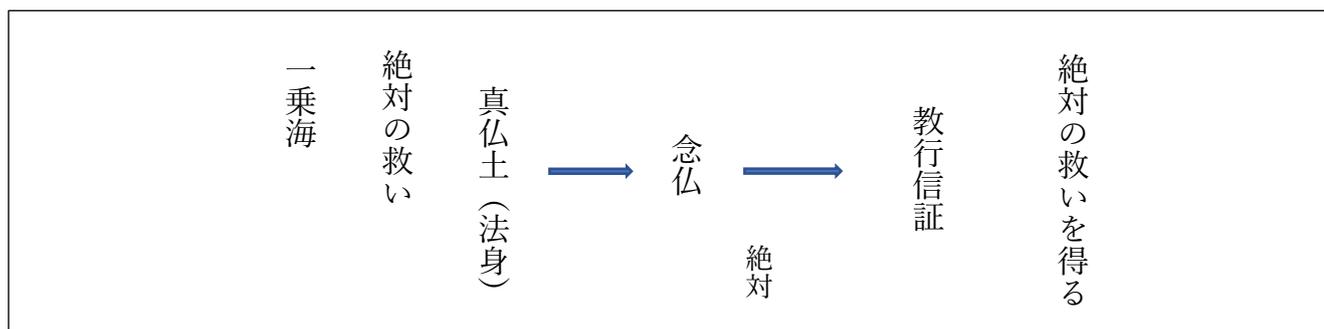
ところが自力の仏教は縦に努力をして超えていかなければならない豎(じゅ)、それから、超、念仏は頓、すぐに、超。超える、この世を超えろという意味があるけれども、自力の方は渡る、一つ一つ、一步一步渡っていくような教えである。念仏は阿弥陀如来に順じているけれども、自力の方は阿弥陀如来に反逆する。こんなふうに、ここは四十八の形で「～対」・「～対」・「～対」・「～対」と言っていきます(東、西聖典は四十七対、島地聖典は四十八対。※法滅利不利対が島地聖典では法滅・不滅對と利・不利對に分かれている)。そして200ページのところで、四十八やってその後、

「この義かくのごとし」。念仏は自力の教えに対してあらゆる点で優れているでしょう。だから「本願一乗海を案ずるに、円融」、円融というのはさっき言ったように、煩惱の身のままで一乗の覚りの中に包まれていく。そこに凡夫としての安心と「満足」がある。しかも自力無効という、

その速、「極速」である。そして何者とも比べる必要がない一乗海に立てば、「無碍」、障りが無い、自体満足、これを生きていくんだと。そして「絶対不二の教」えである。絶対と言ってもいい、不二、私たちのように優れた者があれば、だめな者があるというのではなくて、「絶対不二」というのですから、これしかない、これが絶対の教えである。こういうふうに締めくくっていくわけですね。

そして、その次に「また、機について」、さっきは、念仏の「教」、教えについてでしたが、今度は「機について対論するに」とあって、同じように「～対」・「～対」・「～対」・「～対」と、こういうふうに言って、130のところ（科文番号※東聖典992頁上段参照）、「しかるに一乗海の機を案ずるに、金剛の信心は絶対不二の機なり」、いいとか悪いとかとすることを超えた絶対の機である。「知るべし」。こういうふうに絶対だというふうに終わっていきます。何でこんなことをするのか、そもそもこれは教行の巻ですから、機についてはこう言うのなら、これは信の巻で言うべきものかもしれません。ところが教についてこのように言ったので機についてもこうなのだと言って、これでだいたい終わっていくわけです。

何でこういうことをするか、参考書などを見ると、この当時の学問の方法なのだというようなことを書いていますが、法然上人もこれをやります、『選択集』でね。これは、これから『教行信証』を読んでいく時に、化身土の巻が大きな意味を持つのですが、「絶対不二の覚り」と「絶対不二の機」と書いてますから、一乗海の覚りを得ると絶対の救いを得る。こう言うことですね。



そうすると、教・行・信・証と親鸞聖人が書いていて、真仏土、これは教・行・信・証が収束していく法、あるいは南無阿弥陀仏が成り立つ法身と言ってもいい。真仏土の巻です。これはもともと法身、色もなく形もない、言葉も絶えている。しかしこの法身によって念仏が生まれ、この念仏によって教・行・信・証が生まれてきた。だから真仏土の巻、ここにすべてが収まる。こう考えられます。そしてそれは一乗海と言ってもいいから、これは絶対の救いなのだ、これで完成しているわけです。

あるいは、教行の巻だけだったら、一乗海という覚りを出したわけですね。覚りを出したのだから、この覚りによって私は救われたのだと親鸞聖人はおっしゃっているのだから、それで完成しているわけですね。ところが問題があるのです。例えば明恵のように、「お前、それは独断だ」と、「勝手なことを言うな」と、「お前が悟っている証拠はどこにあるのや」と、こうなるわけです。必ず、そういうふうに絶対の救い、絶対の機を明らかにしているわけです。だから絶対の救いを明らかにしている巻が『教行信証』なのです。僕の言っているの分かりますね。ですからそれでいいわけです。個人の救いとしては。

ところがそれは認めないという人がいたらどうする。そんなのほっといたらいいんだと、まあ

普通だとそうやけど、ほっといたらいいと言っても、それだったら自分が絶対に救われたというものの普遍性がなくなっていく、真理性がなくなっていく。そうすると、「それはお前の勝手だ、独断だ」と明恵は法然にそう言っているのです。「それはお前の独断だ」と。それから、「もし、お前救われたと言うなら、それは神がかりだ」と、「俺はそんなもの絶対信じない」と、こう言っているわけです。それはどうする。ほっといたらいいという話やけど、それはほっとけないわけです。それを何とかして説得しなくてはいけない。その時には絶対だということを振り回しても、その絶対が通じないから、だから、必ず相対的に真理性を公開しないと絶対という意味がない。言っていることは分かりますよね。

偉い人はみなそうですよ。さっき控室で出ていましたが、今日は正月だから、みなさん「明けましておめでとう」と言うところですね。山科本願寺で蓮如上人が、正月一日の日に座敷に座っていると、道德という皆さんのようなおじいちゃんや、80歳を過ぎた、蓮如上人のファンや。向こうから廊下を南無阿弥陀仏と言いながら来て、蓮如上人の座敷に来て「明けましておめでとうございます」と言った。そうしたら蓮如上人はいきなり、「**道德はいくつになるぞ**」と。「おかしいな、私の年は知っているはずやけどな」と思っていたら、「**道德、念仏もうさるべし**」(『蓮如上人御一代記聞書』1、東聖典854頁、西1231、島30-1)と言われた。「えっ、今言ってきたよ、俺」と。「空念仏いつまでしているのか」と言っているわけでしょう。「八十何ぼになるまで、お前まだ空念仏しとるのか」、「明けましておめでとう、馬鹿なこと言うな」と。「本当におめでとう言うのは信心を獲った時に言え」と言っているわけですよ(一同共感)。

一番痛いところをばちっと突いて、僕みたいに品がないわけじゃないから、蓮如上人はやっぱり偉いよ、(上品に)「**道德、いくつになる**」(笑)、「**道德、念仏申さるべし**」。「ええっ、俺は念仏してきたのに…」、そういうふうにして、相手の一番だめなところをやはりきちんとやってやらないと本物かどうか分からないのです。

そんなふうに絶対に救われたのだということで、本当はそれで100パーセント完結していたとしても、それに対して、「いやいや、あなたのことは認めません」とか、「あなた大嫌い」とか、そう言う人もいるのです。その時にどうするか、その時は相対的に「ここはちがうでしょう」「あなたが言っているここは違いますよ」と、全部相対的に「違う」ということを証明して「絶対」ということが本物になるのです。そういう方法論として、ここの対論、対・対・対・対ということをしつこいほど言っていきます。これはこの当時の学問の方法というのではなくて、今言ったように、絶対ということを証明するときには相対的にも証明しないとイケない。そういう方法論だと思ってください。

そうすると『教行信証』をこれから皆さんと読んでいきますから、教・行・信・証、ここまでで絶対の救いははっきりしました。そしてこの絶対の救いは「法」というところののっとなっているのですよ、というところまで言って完結です。ところが聖道門が非難するわけです。「いやいやそんなものは認めない」とか、「お前が言っているのは独断だ」とか、「お前が言っているのは神がかりだ」とか、「凡夫に救いなんかはないのだ」と、こういうふうに言われる。だから言っていることについて化身土の巻は、あんまり時間がないので、また化身土に行けば申し上げますが、化身土の巻は、この世で私たちは自力に立って生きていますね。それから聖道門は自力に立って生きています。

ですから化身土の巻の本巻の方、前半は、聖道門の自力の仏教では成り立たないのだというこ

とを批判していく巻だと考えてください。これは、もう少し詳しく言うと、『大経』でお釈迦様が人間の生き様をよく見て、「あなたたちが生きているのは貪欲・瞋恚・愚痴で生きているのよ。その貪欲・瞋恚・愚痴によって社会のすべてが成り立っているのよ」と、「だからそれを超えていきなさいよ」というふうに、『大経』ではお釈迦様が、「教え」、『大経』の教えを、本願の教えを説いて、自力で生きて行くことを戒めている。救われたから何でもいいというわけじゃないよ。救われたら、今度は貪・瞋・痴（とん・じん・ち）の煩惱を何とかして超えたいと、そういう意欲を生きていくことになるから、これで十分だ、つつましく生きていこうと。今はつつましいといってもみんな裕福だから、あんまりぼろぼろの格好をするのも変だから、まあまあ人並みに生きて、これで十分だということをあらゆるところで伝えていく。それしかしょうがないね。その時に、煩惱について戒めていく。これをもとにして化身土の巻は「教戒」という言葉が本巻にいっぱい、末巻にいっぱい出てきます。だからお釈迦様の『大経』のまなざしをもとにしながら、自力の仏教は成り立たないのですよということを証明する巻です。

ところが、今言ったように自力の仏教を批判したとしても、今度は生活があるから、今、私たちの生活で一番力を持っているのは科学でしょう。SNSとか訳のわからないもの、あれは全部科学じゃないですか。この科学と言うのは、当時は星座とか、化身土の巻を見たら分かります。星座とか科学的な考え方、そういう考え方について、それは自力なのだから、それは成り立たないのだということを証明します。あるいは経済、あるいは他の思想、中国の思想、孔子や孟子の思想、そういうものを引き合いに出しながら、私たちの生活が全部自力によって成り立っている。お釈迦様は、それは成り立たないのだと言ってるでしょうと、こう言って化身土の巻は仏道を批判すると同時に私たちの生活の全部を批判して、自力では成り立たないのだということを証明する巻です。それが化身土の巻になります。

そうすると、こちら側（教・行の巻）は絶対の救いを説いている。そこに立って、今度は、こちら側（化身土の巻）は相対的にこの世の出来事を全部批判していく。批判しきった時に初めて絶対が真理だという意味を持つことになります。そういう方法をとって『教行信証』が成り立っているのだということを知っておいて下さい。参考書には何も書いてありません。あんなのは、学問の一つの方法だみたいなことを書いてるけど、いい加減なことを言うなど僕は思いますけど、それはね、いいですか、大乘仏教の歴史がそうだったからです。

まず、最初に大乘仏教の覚りは「空」（くう）でした。龍樹菩薩が空の覚りを悟った。そうすると、「空ってどういうこと？」って訊いたら、「いやいや、どういうことって言っているお前の立場が違うんや」と。「えっ、そんなことを言われても分からない。空というのは空っぽのこと」と言うと、「その空っぽというの違うんや」と言う。全部批判していくわけですよ。そうすると、これは取り付く島がないからね、だから、尊敬する人は、龍樹はお釈迦様の生まれ変わりやと言って尊敬するかもしれんけど、ほとんどの人は、「あいつは神がかりか、なんか悪いきつねがついているのとあまり変わらない」と、こう批判されたときにどうするかという問題です。

その時に世親は、今度は空の覚りが、全部批判するこちら側の人間の意識の方、まず私たちの意識で見るという「眼」、耳で聞く「耳」、鼻で嗅ぐ「鼻」、味「舌」、身で触る「身」、そしてそれを全部自我のところで統一して「意」。眼・耳・鼻・舌・身・意の六識。「六根六識」と言うでしょう。これが私たちの意識です。まずね、簡単に言えば。ところがその意識は、今日、夜寝るでしょう、そして明日起きるでしょう。そうしたら他人になっているわけではないでしょう。一晩自

我がはたらいしていないのに、延塚がまた延塚のまま目が醒めるわけだから、そうすると眼・耳・鼻・舌・身・意という自我と六根を含めた、これだけではないのではないか、寝ていても延塚が続いている。それがないと延塚にならないわけだから。だから「無意識」というのが人間にはあるのやと。それを「阿頼耶識」(あらやしき)と言います。だから、眼、耳、鼻、舌、身、意、それから阿頼耶識と。それを世親は一つずつ分析していく。そして「人間の意識というのは全部迷いだ」ということを証明する。相対的に。人間の意識は全部迷いだということによって「空」という、龍樹が「絶対的な覚り」を言った、それを証明する。

だから龍樹と世親で大乘仏教の覚りを、絶対的に証明したのが龍樹、相対的に証明したのが世親と考えてもいい。すごいでしょ。大乘仏教の流れはそうなっているからです。だから、親鸞も絶対な真実を説いた後に神がかりだとか非難されたら困るから、相対的に、聖道門の、聖道門と言ったら相対するようですけど、浄土教以外の全仏教の否定。成り立たないということを実証する。それから、私たちは科学や経済や他の思想によって生きている。それも自力だから迷いだということを実証する。そのことによって浄土教の真理が、確かに絶対の真理だということを実証することになる。そういう方法をとって親鸞は『教行信証』を書いているというふうに思ってください。それは全大乘仏教をふまえたやり方だと僕は思う。当時の学問の方法はそんなものではありません。そうではなくて、今言った理由があって、こういうやり方をしているのだというふうに考えてください。そうすると教について『大経』が真実だと言うときに、他の経典について全部これは批判しているのだと。これで代表させてますが、それならこの経典はこんなこと説いているけど「どうなの？」と親鸞聖人に訊いたら。「あっ、それは違います」と、必ず親鸞聖人は言えたはずです。そんなふうに相対的に成り立たないということを実証しているのが、この対・対・対・対というところだというふうにお考えいただいたら分かりやすいかと思います。

難しいのよ、こういうのは。僕は学生の時、何でこんなややこしいことをするのと、わけの分からないことを親鸞という人はするなと思っていたのですが、よく考えると、「なるほど」と。「ああ、そうそう」と。絶対だということを実証しないと絶対にならないから、だから化身土の巻も、絶対的な真実である『教行信証』を、真仏土の巻までをもう一度相対的に批判して、自力の批判を尽くして、そして成り立たないということを実証して、浄土教が絶対の真実だということを実証している。そういうふうになっているのだというふうに考えてください。その先書きがこれ、今のところ。

分かるでしょう言っていること。よく分かるでしょう(笑)。だって苦労したのです。ある日突然思いついたのではないのです。何十年も考えて、何でこんなアホなことをするのかと思って、「ああ、そういうことなのだ」と。明恵の批判なんか読んでみると分かります。「ああこれ違うんやけどな」と。「どこが違う?」、「うん、自力だから」。だから、自力が成り立たないということを実証すれば明恵は立場がなくなる。そんなふうに相対的に、今度は他力と自力を相対しながら自力を批判していく。化身土の巻は完全にそうです。

はい、それで、ここも言い出したら切りがないね、201ページから202ページのところ(西200~201、島12-47~48)に、「(なにになに)のごとし」、「(なにになに)のごとし」、「(なにになに)のごとし」というのがずっとあるでしょう。これは『華嚴経』の引用です。善財童子(ぜんざいどうじ:『華嚴経』「入法界品」の中心人物である求道の菩薩)の菩提心を褒める言葉がこれです。だからここは、菩提心を褒めている文章なのです。だから『摧邪輪』を読むと、ここの言葉が何

度も何度も繰り返されて、「法然は菩提心がいないと言った」と。馬鹿なことを言うな、『華嚴經』には、菩提心は「善見藥王のごとし、よく一切煩惱の病を破するがゆえに」と。煩惱をなくすのは菩提心だというふうに、ここは菩提心を褒めている文章なのですけども、親鸞聖人はこれは、201ページの2行目の終わりのところ、ここから『華嚴經』なのですけども、主語を変えて、「悲願は、たとえば、太虚空のごとし、もろもろの妙功德広無辺なるがゆえに。なお大車（だいきよ）のごとし、あまねくよくもろもろの凡聖を運載するがゆえに。なお妙蓮華のごとし、一切世間の法に染せられざるがゆえに。」というふうに菩提心を褒めている言葉を、「悲願」、「法蔵菩薩の本願」というふうに変えて、ここをずっと引用しています。これは分かりますね。

信心は、本願をいただいた心だから、さっき言ったように本当の菩提心というのは他力の信心しかありませんよと申し上げましたね。だから他力の信心の本は本願だから、だから、本願が実はこういうことなのですよ、ということはずうっと言っています。ここも実は、広く言えば明恵の『摧邪輪』をふまえて、自力の仏教を批判しているところです。そうなります。そしてこれが終わって、最後の203ページ（西202、島12-49）、教の巻・行の巻の「伝承の巻」の結積、終わりになります。教の巻に結積はありましたが、行の巻の結積になりますが、203ページ、「ここまで述べてきて分かるでしょう」という意味です。「おおよそ誓願について」、如来の本願には「真実の行信あり、また方便の行信あり」。本願には真実の行信と方便の行信がある。

「その真実の行願は、諸仏称名の願（第十七願）なり。その真実の信願は、至心信樂の願（第十八願）なり。これすなわち選択本願の行信なり。その機は、すなわち一切善悪大小凡愚なり。往生は、すなわち難思議往生なり。」

私たちの分別を超えて本願による往生だから「難思議往生」と、こう言うのだと。そして「仏土」、そこに開かれてくる覚りの世界、「仏土は、すなわち報仏報土なり」。如来の方から、「報」、報いられた土、如来の方から報いられた土である。本願によって酬報された仏土である。「これすなわち誓願不可思議、一実真如海なり」。それこそ誓願不思議のはたらきによって、私たちのところに浄土を開き、そして浄土の真実である一実真如海である、「一乗海の覚り」をいただくのである。『大無量寿經』の宗致、他力真宗の正意なり。『大經』はその一乗の海、大涅槃、それを説いているのが『大經』であり、それこそ他力真宗の正意である。これが最後のまとめになります。もう説明しなくても分かるでしょう。真実の行願と方便の行願があるけども、大切なのは十七・十八の二つの本願。それによって証として浄土をいただく、それは如来の浄土、如来の方から開かれてきた本願酬報の土、報土というのは分かりますね。本願によって酬報された、酬報というのは報われた、自我に報われた土が娑婆です。

権力や経済やその他さまざまなものに縛られて生きていく。それは共通の自我をみんな持っているから、それに酬報された土が娑婆だと考えてもいい。ところがそこに本願によって開かれた土、それは仏土、浄土と言ってもいい。こんなふうに十七・十八の本願をもとにしてまとめていけます。ここはもうそんなに説明することはないね。もう分かるところですね、これまで勉強して来たところですから。

そしてここから「伝統の巻」、「伝承の巻」。私たちのところに伝統されて来たのは『大經』と、南無阿弥陀仏の行ですから、こちら側を『大經』の法、南無阿弥陀仏の法を明らかにしている巻

である。その法を私たちがいただく時には、この行の巻にあるように、諸仏称名の願と至心信樂の願、行信。南無阿弥陀仏を信じる。伝承されてきた『大經』と七祖の伝統を確かに信じます。これによって今度は、信の巻と証の巻、これが開られてくる。ですから信の巻と証の巻は、これは、この伝統をいただいた親鸞聖人ご自身の感動ですから、これは曾我（量深）さんの言葉ですけれども、自己の「己証」、親鸞聖人の自己の己証、親鸞聖人が自分で証明していく巻。これが信の巻と証の巻である。「伝統の巻」に対して「己証の巻」、そしてここまでは教と行という

「法」を中心に述べてきましたが、ここからは、今度は御自分の信心と御自分の証だから、だから法を明らかにするということから言えば、信証は「機」、機を明らかにすると言っていいと思います。こういう関係になっている。もちろんこの法と機を繋ぐのは、南無阿弥陀仏と頭を下げて

証 卷	信 卷	南 無 阿 弥 陀 仏 を 信 じ る	行 卷	法 教 卷
	己 証		伝 統 (伝 承)	

信じることだから、南無阿弥陀仏を信じる、ここが一番大事になるわけです。ですから、この南無阿弥陀仏ということは、どっちにも重要な意味を持っている。法という意味で大切ですね、法という意味から言えば『大經』が説かれて以来、それから七祖からずっと伝統されて来て、たくさんの方が救われて来たのだから、分かるとか分からないとかを超えて南無阿弥陀仏

は大切ですよと、こういう意味があります。たださっき蓮如上人が言ったように、「いつまで空念仏しているのか」という問題が残るから、機という側面から考えると、これはやっぱり信じるということをはっきりさせなさいよと。

法ということから言えば、分かった人も分からない人も南無阿弥陀仏の念仏は大切ですと言わなければいけない。けれども、それだけでは困るので、蓮如上人のように、さっき言ったように「いつまで空念仏しているか」、「明けましておめでとうと、世間通途の挨拶などするな」と。

「本当に“明けましておめでとうございます、”と言えるのは、お念仏を頂いた時じゃないですか」と。その信心が大事ですよというのは、機という側面から言えば信心が大事だと。こういうことになりますから、そういう、つまり機と法に関わっているのが南無阿弥陀仏だから、だから法という側面と機という側面と二つあるから、それを混同すると喧嘩になりますね。混同しないように考えていただいたらいいかと思います。『教行信証』の全体がこういう形になっています。

ですから、ここに、これから本当は勉強しないとイケないのですが、「正信偈」が長く、伝統の巻と己証の巻の間に「正信偈」が歌われていくことになります。ですからこの「正信偈」が南無阿弥陀仏の歌であり、『大經』の讃歌である。こういう意味を持っているわけです。

それでここは、前にも一度申し上げたことありますが、『教行信証』は、経典を引用するときは「『大經』に言（のたま）わく」、この言を使う。あるいは「『観經』に言わく」、「『大集經』に言わく」、他の経典でも全部、経典であれば、お釈迦様の経典ですから敬意を表して「言（のたま）わく」を使う。論のときには「龍樹菩薩の『十住毘婆沙』に曰（い）わく」、「世親菩薩の『浄土論』に曰わく」、というふうに、この「曰（い）わく」を使う。それから註釈のときには、釈、曇鸞以下、曇鸞の『論註』も釈ですから、經・論、釈という分け方からすれば、釈の引用のときには「云（い）わく」、これを使う。これが全部の『教行信証』の引用の仕方のルールです。あらゆるところの引用がそうになっていますから見てください。

一つ例外があるのです。『論註』。これは『浄土論』の註釈ですから、本当は「云わく」を使わ

ないといけない。ところが全部「曰わく」を使っていますから、『論註』だけは論扱いです。註釈だけでも論扱いです。こうなっています。どうでもいいですけど、例えば、経・論・釈の引用、212ページ、213ページ（信の巻）。ここは経と論の引用ですから、212ページ（西212～、島12－56～）のところは『大経』に言（のたま）わく」。そうですね。それから「本願成就の文、『経』（大経）に言わく」。「言」ですね。それから『無量寿如来会』に言わく」。「言」ですね。「（如来会）また言わく」。「言」です。全部経典は「言」です。そうですね。ところが（213頁）『論の註』に曰（い）わく」と、『論註』だけは「曰」という、この字を使っています。本当は『論註』は釈なのですけども、この「曰わく」を使って引用しますから、『論註』だけは「論」扱いです。これには深い理由がありますが、今日はもう時間がないから、今はそれを省きます。

それで、私が言いたいのは、203ページ（西202、島12－49）に戻ってみましょう。ここに教、行と述べて行の巻の結釈が今述べられました。いいですね、そしてこの後、「正信偈」が歌われますが、「正信偈」の前に少しだけ文章がついています。これを「偈前の文」と言います。「正信偈」の前にありますから、偈の前にある文章、こういう意味です。ところがこの文章は今のルールを破っています。「ここをもって」、「ここをもって」と言うのは、教、行と述べてきて、「今、行の巻が終わりました。だからこれでお分かりいただけますでしょう」と。「知恩報徳のために宗師（曇鸞）の釈を披（ひら）きたるに言（のたま）わく」と。「言」という。これは経典に使う言葉でしょう。ところが実際に引いているのは、これは『論註』なのです。

これはどういうことかと言うと、あまり詳しく言うと時間がありませんが、世親の『浄土論』は「世尊我一心」から始まりますね。この「世尊我一心」の「世尊」の註釈の後半がここです。前半は違うところに出てきますが、世尊と言うのは、今、私たちはお釈迦様を呼ぶときに「釈尊」と言うでしょう。世尊とは言わないじゃないですか。「世尊」と言うのは生きたお釈迦様を呼ぶ呼び方です。だから仏弟子たちがお釈迦様のことを「世尊、世尊」と呼んだわけですから。ところが世親はお釈迦様が亡くなってから千年以上経っているのに「世尊」と呼んでいるわけです。ここがおかしい。「釈尊なら分かるのだけど、なんで世尊と言うの？」という意味です。私たちはボーと勉強していますから、そういうことに気が付きませんが、この世尊という呼び方は、生きたお釈迦様を呼ぶ仏弟子たちの呼び方なのです。「尊者、尊者」と言う呼び方と一緒に。千年以上経ってなんで世親が生きたお釈迦様の呼び方で呼ぶのというのが、そもそもの曇鸞の問いです。

それに対して、前半は註がありますが、それをのけて、ここに印を付けてほしいです。「ここをもって知恩報徳」、これ、「知恩報徳」。教と行を読んで分かるでしょうと。お釈迦様と阿弥陀如来の御恩を知って、その徳に報じていくような生き方を。それを実は大乘では菩薩道と言うのだと。私たちは凡夫だから菩薩道とは言わないけれども、菩薩道とは言わないと、だけど菩薩道に匹敵するのがこの「知恩報徳」ということだと。この言葉をよく腹に入れてください。真宗の核心は知恩報徳である。『大経』の核心は知恩報徳です。そして曇鸞の『論註』の文章が出てきますから、ざっと読みます。菩薩道が出てきます。

「それ菩薩は仏に帰す。孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動静己にあらず、出沒必ず由あるがごとし。恩を知りて徳を報ず、理宣しくまず啓すべし。」

ここまで一つね、日本語にしますよ。菩薩は仏に帰依するのである。だから菩薩道に立つのです。それはちょうど孝行な子供が両親に帰依したり、忠義をもつ家臣が朝廷に帰依したりするの

と一緒に、菩薩は仏に帰した、その仏のはたらきによって教化に出るのだから、動静己にあらず。立ち居振る舞いは自分の個人的な恣意ではない。仏の意志を頂いて菩薩になるのだと。だから菩薩というのは仏の意志がはたらいているのだ。出沒というのは、これは教化のことです。教化する。だから菩薩が教化するということにも必ず理由があるのだと。それは『大経』に依れば、「恩を知りて徳を報ず」ということだと。「知恩報徳」はここに出てきます。だから菩薩が菩薩道を歩むのは、仏の意志を歩んでいるのだと。私たちは『大経』に依って、凡夫だから菩薩とは言えない。だけど知恩報徳、これが『大経』の核心になるのだと、こう言っているのです。

だから「言(のたま)わく」と、『大経』の「言」を使っています。『論註』の文章だけど『大経』なのだ。これで師事している。『大経』の核心は知恩報徳なのだ。こう言っている。分かりますね。そして、「理宜しくまず啓すべし」。だからこそ道理として初めに、「世尊我一心」というふうに世親が言ったのだと。これが一つ。

もう一つは、「だからこそ阿弥陀如来の本願は軽くはないのだ」と。「もし阿弥陀如来が本願を加えてくださらなかったとしたら、「将(まさ)に何をもってか達せんとする」。「願生偈」を歌うことはできなかつたはずだ。だから「願生偈」という歌は世親の個人的な歌ではなくて、「本願の歌」なのだ。阿弥陀如来の本願に依って歌った歌なのだから、だから阿弥陀如来が本願を加えてくださらなかったら、どうして「願生偈」を歌うことができたのでしょうか。

だからこそ本願を請うて、「世尊よ我は一心に」と言って、初めに「世尊我一心」と述べたのだと。こういう意味なのです。詳しく言うと前半分は、これはお釈迦様に対して、お釈迦様がお釈迦様の意志を頂いて菩薩になるのだと。釈迦仏に依って菩薩になる。後半分は、お釈迦様に依って明らかにしてくださった阿弥陀如来の本願に依って「願生偈」を歌ったのです。ですから、釈尊と阿弥陀の二つの恩徳がこの「世尊」という呼び方の中に込められているのですよ、と言うのが曇鸞の註釈です。

これを善導のところまで行くと「二尊教」、釈迦の発遣と弥陀の招喚というふうになっていくわけですが。しかし曇鸞のところでもちゃんと「世尊」と言ってるけど、それはお釈迦様に対して言っているというだけでなく、お釈迦様に教えられた阿弥陀如来の本願に依って歌っているのだと、こう言ってるわけです。だから「願生偈」は本願の歌である。

その次、「しかれば大聖の真言に帰し」、だからわたくし親鸞も、大聖釈尊の真理の一言、南無阿弥陀仏に帰して、「大祖・七祖の解釈に遇って、仏恩の深遠なるを信知して」、つまり知恩報徳のために、「正信念仏偈を作りて曰(い)わく」と。「曰わく」とこの字を使っているでしょう。自分の「正信偈」に世親と同じ「曰わく」を使っています。だから親鸞ご自身が「正信偈」を中心にして、この『教行信証』は『大経』の論であると。親鸞は、お釈迦様、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空の次に生まれているから、本当は「釈」のはずです。ところが『大経』は凡夫を救うという経典であると同時に大乘の菩薩をも救うという経典なのです。ですから『大経』には対向衆(たいごうしゅう)が二つ説かれます。大乘の菩薩たちと阿難を中心とする凡夫と、二つ説かれます。大乘の菩薩の代表として世親が「願生偈」を書いた。凡夫の代表として親鸞が日本で『大経』の論書を書いた。その論が、この『教行信証』ということになる、と親鸞聖人がおっしゃってますので、私が言っているのではありません。親鸞聖人がそうおっしゃっていますので、親鸞聖人の通りに了解するべきだというふうに思います。

すごい自信でしょう。もう時間がないのですが、『尊号真像銘文』というのがあるでしょう。こ

れはお名号とか、それから絵、親鸞聖人の御影、有名なのは「熊皮の御影」、熊の毛皮の上に座った絵があるでしょう。それから「安城の御影」というのがある。これは83歳の時の親鸞聖人の御影ですから、ちょっと年を取っています。こうして口がちょっととんがっている。けどなんかよさそうなおじいちゃんの顔になっている。それから、もう一つは「鏡の御影」という親鸞聖人が立った御影がある。これが三つ有名な御影ですね。

この御影には、例えば熊皮の御影には、上の方に六角堂で見た夢が書かれている。「行者宿報設女犯」や。「あなたが女性がほしいというのなら、私が玉のような女性になってあなたに犯されましょう」(『御伝鈔』、東聖典725頁、西1044、島31-2)という、あの文章が掲げられている。だから、あの熊皮の御影は、「俺は、ただおさまった坊さんじゃねえぞ」という、つまり「俺は生活者なんや」と、「普通の男なんや」と。そして熊の毛皮の上に座つとろう、こうやって。かっこいいやろう。

安城の御影は、ちゃんと衣を着て、それでも前に猫の毛皮の草履と猫の毛皮の杖と火鉢が置いてある。ここは、下着は赤やぞ。かっこいいやろう(笑)。真っ赤やぞ。あれは紅花の下着と言って虫やらが来ないらしいな。それから肌が荒れないんやて。だから肌にいいらしいわ。だからあれきつと、「ご院さん、これ着なさい」と言ってやったのでしょ。ちゃんと赤いのを着ているでしょ。その安城の御影の一番下のところに「正信偈」が書いてある。だからこれは真筆だから、親鸞聖人が83歳の時の絵だと言っているけれども、多分80歳過ぎた83か4か、絵が出来たときに自分で書いたのでしょ。その書いてるのがここに出ている。(『尊号真像銘文』)、530ページ~531ページのところ(西670、島17-11~12)。これ見てごらん、こう書いてるのです。

「和朝愚禿積の親鸞が『正信偈』の文」、ここまでは龍樹、天親、ずっと七祖を書いているのです。最後に、和朝、日本の国の愚禿積親鸞という人の「正信偈」の文と書いて、

「本願名号正定業 至心信楽願為因 成等覚証大涅槃 必至滅度願成就 如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如来如実言 能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃 凡聖逆誘 齊回入 如衆水入海一味 摂取心光常照護 已能雖破無明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天 譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇 獲信見敬得大慶 即横超截五惡趣」

ここまで書かれている。分かりますね。これが『大経』の讃歌の中心になる。「正信偈」の中心になる。僕が言っているのではない、親鸞聖人がこれだけ抜き出しているのだから。いいですか、「正信偈」をあげるときに、「今日の飯は何を食おうかな」とか色々考えるでしょう、その時「本願名号~」と、ここまで来たら、「ああ、あかん、親鸞聖人がちゃんと書いとった」と思い出して(笑)。ちゃんとここ読んだら、僕が今しつこいように読んだけど、ここをずっと読めば、『大経』の「一心帰命」と「一心願生」、煩惱の身だけど、この身が消えないのだと。けどいったん無明が晴れた、人間は雲や霧がかかっても雲や霧に邪魔されないで仏になるという道を歩むのだと。だから「雲霧之下明無闇」、煩惱の雲の下は明るいのだと。これは願生の感動です。そんなふうに『大経』を「一心帰命」・「一心願生」ととらえて、そしてここにきちっと押さえられている。だから「正信偈」は『大経』の讃歌である。

そして『教行信証』は「正信偈」を中心にする『大経』の論書である。凡夫として初めて親鸞聖人がお書きになった論だと。論と言うのは覚りそのものを表現するから、註釈だったらまだ分かりやすい。ところが論は覚りを教の面から、行の面から、信の面から、証の面から、立体的に

表していくから、私たちの平面的な考え方の中には納まらない。だから、何んか読むと跳ね飛ばされるような感じがするのは、覚りそのものが言葉になっているからです。論だというところに難しいという意味の理由があります。本来ならば「正信偈」をまた拝読しないといけません、今のところを『尊号真像銘文』は丁寧な註釈しています、親鸞聖人が。その註釈を丁寧に何度も何度も読んでごらん。もうね、頭が悪いので忘れるのは十分承知の上（笑）。そんなことは関係ないのです。一年間読んでいたら絶対身につくから。だから何度も何度も読んでいただきたい。というふうに思います。今日で教と行の巻、伝承の巻を終わります。この次から信の巻に入っていきます。一応今日はこれで終わりますが何かご質問があればどうぞ。

質疑応答

質問者 1 ・ ・ すみません、よくわからずに聞くのですが、絶対不二の教とか、絶対不二の機とかというお言葉が出てまいりまして、そこは非常に何んと言うか難しいお話をいただいたと思うのですが、私、これはどうなのだろうと思うことがあって、絶対他力というものに出遇っても私どもは、すぐにそれを自分の手に握ろうとするところがある、実体化し対象化し、物にしてしまう。そこにすでに相対的な物になってしまう。他人と論争して、他の論者と論争をして、その絶対性を証明するという事は、私はまず難しいと思うのです。証明の仕方があると言われればそれまでですが、本当の敵は私自身ではないかと思うのですが、そのことについては、ここではどう考えたらいいのでしょうか。

先生 ・ ・ あのね、教と行について、今論じています。教と行と言う時には、「一心帰命」というところで教と行が成り立ちます。だから一心帰命というところで親鸞は今述べているわけです。その時には、いいとか悪いとか、勝つとか負けるとかという分別、二の分別ではない「絶対不二の教え」に遇った。これを讃嘆しているわけです。褒めているわけです。それから「絶対不二の南無阿弥陀仏」、私たちの二の分別を超えた絶対の南無阿弥陀仏の教えに遇ったのだと言って、今讃嘆しているところです。法についてはそういうふうに讃嘆する以外にないですね。これは分かりますね。

今、岡田先生がおっしゃっているのは、先生ご自身の機の問題。そうですね。この機の問題は今おっしゃったように信の巻にいくと、例えば一心帰命の時に無明が破られたと。ところが無明が破られたと言っていても私の根性はいつまでたっても不純だし、不だし、不相続であると。こういうふうに、今度は機の問題が別の場面に出てきます。

これ（教・行）は一心帰命というところに立って法を讃嘆している場面、場所。こちら（受けとめる）側は先生がおっしゃっているように機を反省している立場で言っているところ。それを混同すると分かることが分からなくなるから、教・行の巻の法を宗祖が讃嘆しているときには、素直に讃嘆している。絶対不二。二の分別が破られて、絶対という意味を頂いたのだ、ありがたいと頭を下げている。それを私が分からないからと言って、機のところ引張って来て「これどうなるの？」と言うのは、それはあなたの問題であって親鸞の問題ではない、とはっきり、きちっとしておかないと問題が錯綜して分かることが分からなくなる。

それは信の巻のところでもう一度問題になってきます。そして、それが今度は「願生」というところで大問題になってきます。つまり念仏生活の中の私たちの問題ですから、今、先生がおっしゃっている問題はとても大事な問題です。大事な問題だけれども、教、行のところではそれを持ち出してくるのは場所が違う。あの相撲の本場所とトーナメントぐらい違いますから、その違いをよく心得ておいてください。

質問者 2 ・ ・ 今日、先生が板書していただきましたが、南無阿弥陀仏がまずあって、それを証明するために『教行信証』を親鸞聖人は書かれたということでもいいのですかね。南無阿弥陀仏がまず一番だと、そのことをまあ私は気付かせてもらったのですけども。

先生 ・ ・ はい、伝承、伝統、法と言う意味から言えば、おっしゃってくださっているように南無阿弥陀仏がまず説かれました。そして私たちの思いを超えて南無阿弥陀仏は今まで伝わって来ました。そういう意味でおっしゃっていることはその通りです。その通りなのですが、親鸞聖人の『教行信証』は、先ほど蓮如上人が言ったように、「空念仏をするな」と言うことがありますから、150ページ（西132、島12-2）を開けてください。これは『教行信証』の総序です。

「ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。」とありますね。そして、その次、印を付けておいてください。

「真宗の教行証を敬信（きょうしん）して」と、こうあるわけです。「真宗の教行証」というのは、今の文脈から言えば、お釈迦様が説いてくださった『大経』と、それから西域から日本にまで伝わった七祖の方々が明らかにしてくださった「教行証」、それを私は敬って信じるのだと、こうあります。ですから伝承ということから言えば、証まで含めて、七祖が教・行・証を明らかにしてくださっている。そういうことですね。だからそれはそれでいいわけです。

ところが親鸞聖人はこれを、「敬って信じる」、これが親鸞聖人のお立場です。立脚地ですね。ですから『教行信証』は信の巻に別序を付けて、信の巻を明らかにします。これは親鸞聖人の立脚地、信の巻はね。これから皆さんと読んでいきます。親鸞聖人の立脚地。ここから私は、教を、行を、証を明らかにしていきますよと。これが『教行信証』の全体の構造です。ですから、ここに別序を付けて、これは「教行証」というものの中に含まれるのではなくて、これは私の立脚地ですよと、ここに立って明らかにしていきますからねと、こういうのが『教行信証』の全体の構造になります。そういう意味から言えば、この信心ということがやっぱり大事だと。ですから行信、だから第17願と第18願の信心、これが大事だと。17と18の行信、これが大事だと、こういうことになります。

質問者 2 ・ ・ 17願も18願も結局同じことを書いているのですね。

先生 ・ ・ 18願の方は信心、17願の方はお念仏。だから17願は行の巻の標挙（ひょうこ）、18願は信の巻の標挙というふうにきちんと分けているわけです。本来二十四願経という古い経典は17願と18願は一つになっています。それを『大経』はちゃんと行と信に分けて、17と18

に分かれている。だから17願は行の巻の標挙、だから行です。18願は信の巻の標挙、だから信です。というふうに、この行信ということ、行は教えに説かれている、さっき言ったように南無阿弥陀仏が法と機の境にあるから。

質問者2・・・先生暴論ですけれども、結局一言で言えば南無阿弥陀仏で救われるのだよと、そのことを、手を代え品を代え親鸞聖人は書き物として残してくださったということでもいいですか。

先生・・・いいです。いいけども、もうちょっと言います。その通りです。その通りだけど、それは他人事とか学問ではなく、私が救われたから、それを正直に言いますよということがある。そこを無視して「南無阿弥陀仏で全部救われますよ」と、こう言うと新興宗教とあまり変わらなくなる。分かりますね、言っていること。

親鸞聖人の場合は「南無阿弥陀仏で救われますよ」ということを、それこそ、おっしゃるように丁寧に義を尽くしておっしゃってくださってますけども、それは全部私が救われた感動ですよ、これがあります。そこを忘れないようにしてください。そのために信の巻が別開されている。だから、信の巻をこれから読みますけど、今言ってるように、教、行、証と信の巻はちょっと違うんです。そんなふうに考えていただいたらどうでしょうか。

質問者3・・・今日「己証」という言葉が出てきましたですよ。「自証」、「己証」というのはどういう意味なのでしょう。どう違うのかというか。

先生・・・「自証」と「己証」の違い？「己証」の意味？「己証」とは自己の証（あか）し。親鸞聖人ご自身の証し。自証でも一緒、親鸞聖人ご自身の証し。親鸞聖人ご自身の証しだからと言って、あなたの証しにはならない。「正信偈」書けますか（笑）。一人ひとりの「正信偈」を書かなくてはいけない。私が救われた感動、それを歌にしましょうと。それが「正信偈」ですから。それが「己証」の証拠です。歌を歌う。シンガーソングライターとはちょっと違う（笑）。本願の歌だから。だから私たちは親鸞聖人の己証を中心にして教・行・証を明らかにして下さっているから、救われた人がこう言うのだから、それをよくよく勉強して、できたら近づきたいと。こういうことですよ。そのためには、どこが違っているのか、どこが合っているのか、いろいろ考えながら聞法する。そしてやっぱり、昔のばあちゃんやじいちゃんの中に分かった人がいます。「あっ、そうや！」と。その時に初めて、「そうそう、ずっと親鸞聖人が横におってくださった」とか言っているのです。そういうじいちゃんやばあちゃん、昔からいるでしょう。「ああ私の苦労なんかどうでもない、法蔵菩薩のご苦労に比べたら私の苦労なんか屁（へ）みたいなもんや」というようなこと言って平気で生きとった人達がおるでしょう。あれは親鸞聖人の己証がやっぱり腹に落ちたのです（一同共感）。これを読んでいて腹に落ちたのです。偉い人がいっぱいいたのです。

田畑先生・・・先生、そこの質問に「自証と己証」とどう違うのですかというのがあると思うのですが、自証と己証は同じかと。

先生・・・これは後で使った言葉だから、特によく使うのは曾我（量深）さん。曾我さんが自証と己証と、よく使う言葉です。僕は曾我さんではないので（笑）、曾我さんは自分の自証をふまえて言っているのです。親鸞聖人の己証を自分がこう思うのだということを自分の自証として語っているわけですよ。そういう微妙な使い道の違いがありますけれども、これは曾我さんの使い方なのです。だから今言っているように、親鸞聖人が己証として自分が救われた感動に立って、「念仏すればだれでも救われるのだ」と、「ここに書いてるでしょう、ここに書いてるでしょう、その通りです」と書いているのを読んで、「そうかな」と僕らは思う。「いやいや、それはどうもよう分からん」と思うかもしれないけど、違うところから開かれて来るから、心配しなくても。

勉強していて、「ああ分かった」と言うのは大したことない（笑）。まあ分からないけど、何か人生の中でいろいろあるでしょう。金に失敗したり、女に失敗したり、男に失敗したり、株に失敗して、「およー」（朝ドラの方言）言ってやってるでしょう。ああして、「もう死にたい」、「もうあかん死のう」と思ってるときに、「汝一心正念にして直ちに來たれ」と。「ああ、呼んでる、呼んでる」という、そういうことが分かるときが来る。そうすると、「ああ、俺のために法蔵菩薩は身を捨ててくれたんや。こんな苦勞なんてどうということはない」と立ち上がっていけるという、そういう、何か自分の人生の、何と言うか、あっちにぶつかり、こっちにぶつかりすることがチャンス、チャンス！。そういうところからパーンと、勉強したのが開かれて来るから。開かれて来ない人はいいい、そのまままで合わせだから（爆笑）。

田畑先生・・・ありがとうございました。時間が4時半になりましたので第20回はこれで終わりたいと思います。最後に恩徳讃をお願いします。（恩徳讃、終了）

テープ起こし、文章化：安達洋太郎さん
添削：田畑正久先生、住職